

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**大学院学生研究**  
**2015 年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
<b>研究代表者</b> (2016年3月現在のものを入記)	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程三年		熊谷 めぐみ 印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名
	文学研究科・教授		新妻 昭彦 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	ディケンズ後期作品における都市の表象		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを入記	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程三年		熊谷 めぐみ
<b>研究期間</b>	2015 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

チャールズ・ディケンズの後期小説における都市の表象を分析する。都市の中でも、ディケンズ作品で重要な位置を占めるロンドンの表象に重点を置き、比較対象として田舎の表象も分析する。ディケンズ作品における都市の表象を分析することで、1850年代から60年代のロンドンが抱えていた問題、人々を取り巻く規範や価値観を考察するとともに、都市の表象の変化を考察する。ヴィクトリア朝ロンドンが抱える問題として、人口過密、犯罪の増加、貧困、不衛生などといった社会問題のほかに、成功するためには他人を陥れ、その労働を搾取しなければならないといった風潮が、勤勉や自助自立といった時代精神の裏に存在することを、ディケンズの後期作品に頻出するようになる、都市に生きる無気力な独身男性の表象に着目し、時間の流れという観点から考察する。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ Charles Dickens } { ロンドン } { 独身者 }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、ディケンズ後期小説における都市の表象を研究テーマに、具体的なテーマとしてはロンドンと独身者の表象を中心に研究を行った。本年度の研究成果として、ディケンズ・フェロウシップ日本支部全国大会、日本イギリス児童文学学会全国大会、立教英米文学会での口頭発表を行い、紀要に論文一本投稿をして採用となった。

## 独身者の表象

前年度に引き続き、ディケンズ後期小説に台頭する都市に住む独身者と都市特有の問題との関わりを研究し、ヴィクトリア朝中産階級の規範を脅かす存在として、また時間の流れに逆らう存在としての都市の独身者の役割を明確に示した。“*Odd Women*”と呼ばれ、社会問題となった独身女性たちに比べ、ヴィクトリア朝社会において、独身男性はそれほど問題視されなかったとされるが、特に家父長制社会が揺らぎ始めたヴィクトリア朝後期になると、独身男性たちはより規範を脅かす存在として認識されるようになった。結婚を忌避する男性が社会問題の原因の一つとして非難され始めた時代に、ディケンズはどのような独身男性像を提示していたのか、*Our Mutual Friend* と *Little Dorrit* を中心に考察した。*Our Mutual Friend* では、トゥエムローと、ユージーン・レイバーンを中心に、*Little Dorrit* では、アーサー・クレナムの表象を中心に分析し、独身男性のキャラクターたちが陥る、fancy への耽溺や energy の忌避を、現在よりも、反復される美化された過去を望む傾向であり、一家の長として、大人の男性として生きることを拒絶したいという意識の現れであると分析した。

少年時代の延長のような不安定なユートピアに漂う独身者たちは、また、ヴィクトリア朝の重要なキーワードの一つである、“progress”の概念に反する時間感覚を有する存在であることを明らかにした。ディケンズ後期小説において、立身出世を目指して猛進するキャラクターは、自身の社会的地位上昇の障害となる存在や過去をためらいなく切り捨て、ひたすら前進し続けるキャラクターとして非人間的な要素を強調されているが、これに対し、過去に執着し、現状に停滞する独身者のキャラクターたちは、時代の流れに逆行する存在として示されると同時に、人間味を併せ持った人物として描かれるようになる。*Our Mutual Friend* と同じ 1865 年に出版されたルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』には、アリスが退屈に沈む描写など、他にもキャラクター表象の共通点があり、童謡を口ずさみ、自分の生き方さえも riddle として茶化すユージーンの姿は、そのナンセンスさにおいて、アリスの世界と間違いなく通じ合うものがあり、ルイス・キャロルとディケンズといった、性格がまったく異なる作家に、同時代のヴィクトリア朝社会の同等の様相が見られることは、注目すべきことではないかと分析した。猛然と利益や地位の向上を求めて前へ前へと直進する人々、そして、そのような一方的で直線的な流れやその過剰な速さを忌避しようとする、停滞した、あるいは過去の幻想を懐かしみ後退する存在としてのユージーンたちのような人物が、キャロルと同じ独身男性として描かれていることは、決して偶然ではなく、必然であったと考えられる。以上の点から、ヴィクトリア朝の重要なキーワードであった progress が示す、時に非人間的でさえある、前進し続ける時間の流れに逆行する存在として、独身男性像を捉え直し、彼らのヴィクトリア朝の時間感覚への抵抗と、退屈に沈む様子やナンセンスさなどから、ディケンズ後期作品と同時代のルイス・キャロルの作品との共通点を示した。ディケンズは後期の長編小説において、過去に囚われた独身男性や、結婚を忌避し、大人の男性として生きることを拒絶する独身男性を描いたが、彼らは単に大人になり切れない未成熟さを意味するだけでなく、盲目的に進む時代の流れに抵抗する、規範から外れた人物としての働きを担い、好意的に描かれたと分析した。前へ前へと進む時代に、停滞し、あるいは後退する存在として、違う時間軸を示す独身者たちは、同時代に少なからず存在した、progress とは異なる動きを体現し、伝えてくれる存在として位置づけられるのではないかと結論付けた。

## 研究成果の概要 つづき

## ロンドンの表象

ディケンズ後期小説に描かれるロンドンの表象として、他に *Great Expectations* を用い、主人公ピップの都市への憧れと幻滅の行方を、ロンドンと彼の故郷の表象を中心に考察した。19世紀ヴィクトリア朝は、イギリスが最もその繁栄を誇った時代であり、産業革命を経て台頭した新興中産階級は、ヴィクトリア朝においてその経済力を武器にさらにその数と力を増し、旧来の厳しい階級の縛りを越えて、社会的な身分を向上させるチャンスをつかんだ。社会的な成功と身分の上昇を切望する人々が、夢を叶える成功の地として選んだ舞台こそが、人口増大とともにその規模を拡大し続ける巨大都市ロンドンであった。約束の地ロンドンは、富や権力を手にすることができる幸運の地である一方で、犯罪と貧困のはびこる場所であり、莫大な富と壮絶な貧困が、わずかに通りを一つ隔てたところに共存するロンドンは、栄光の光とその光によって生まれる影という強烈なコントラストを孕む矛盾の都市でもあった。ロンドンに過剰な憧れを抱くことになったピップの心理は、彼の生い立ちと、罪人との出会いと深く結びついているが、ピップの一人称の語りにあるように、無垢な子供であったのに、少女エステラとの出会いにより初めて自尊心が過剰に育まれたということではなく、彼女に会う前からその後の忘恩を感じさせるような自尊心を見せていたことを、ピップの抱いていた不公平感と結びつけ明らかにした。

ロンドンはいずれまでの境遇を忘れ、人生の一発逆転を狙うことのできる夢の地として、故郷を出ていく辛さを超えた希望をピップに与えることになるが、ピップが目にした醜く汚いロンドンこそが、当時のロンドンを象徴する負の一面であり、それはまた、成功の地ではなく現実の場所として見たロンドンの姿でもあった。また、まったく異なるはずのロンドンにも、田舎を思い起こさせる場所があるというウェミックの言葉は単なる誤解ではなく、都市が田舎を内包するように、その二つが互いに同じ機能を補完し合う可能性をディケンズが示唆しているのではないかと指摘した。ロンドンで墮落した、夢破れた数多くの若者の一人となり、遺産の真実を知り絶望したピップは、少年時代にあれほど忌避した故郷こそが自分の帰る場所なのだと考えるが、このことは、田舎において希望の地ユートピアとしての機能を果たしたロンドンが、その方向を変え、ロンドンにおいてのユートピアがピップにとって故郷になったためであることを指摘した。ロンドンを過大評価していたように、今度は故郷を過大評価したピップは、不満と不安だらけの現実の過去とは異なるユートピアとしての子ども時代を過ごした地である、故郷へと帰っていくが、ピップにとって故郷が理想的に映るのは、彼がいまや部外者であるからに過ぎず、ロンドンと田舎が互いに、互いに対してユートピアの地として、現実逃避の憧れの場所として機能していることを思えば、その幻滅も共有し得ることを言い当てたウェミックの言葉は示唆的なものであったと分析した。

*Great Expectations* において、ディケンズは、ロンドンとピップの故郷を、どちらも理想化することのできないものとして、描き出し、理想化しがちな都市における田舎の表象と、田舎における都市の表象に、新たな光を当てているのではないかと指摘した。双方のユートピアの幻滅という形で示された都市と田舎の表象は、もはや対立するものではなく、互いに影響を与えあうもの、特に地方はロンドンの影響を免れないものとして示されており、最も繁栄した時代を終え、帝国の支配が強大化される 1880 年代ごろから再びイギリスに過剰な田園の理想化の波が来ることを思えば、本作のディケンズの都市と田舎の表象はさらに興味深いものであると考えられるのではないかと結論付けた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

1. 「レイミア」をめぐる視線、『湘北紀要』(湘北短期大学)、35号、2016年3月、127-39頁。

④ 学会発表

1. ディケンズ・フェロウシップ日本支部平成27年度秋季総会、2015年10月10日、「ディケンズ後期小説における独身男性の表象」(於日本大学)
2. 日本イギリス児童文学会第45回研究大会、2015年11月29日、「美しい孤児たち——*Ragged Dick*を中心に」(於川村学園女子大学)
3. 2015年度立教英米文学会、2015年12月19日、「失われた故郷——*Great Expectations*にみるロンドンの表象」(於立教大学)